

家族力大賞'11

—作品集—

く家族や地域の

「きずな」

を強めよう

社会福祉法人

東京都社会福祉協議会

もくじ

新しい家族力に向けて

東京都知事賞

社会福祉法人 東京都社会福祉協議会

会長

古川 貞二郎

大きな家族みたい！みんなの実家

藤田 房江…… 3

東京新聞賞

人は人とながって元気になっていく

土屋 比佐子…… 11

東京都社会福祉協議会会長賞

心の旅は音楽とともに

生沼 牧子…… 19

漂流していた心

當間 舞…… 24

カブトムシはすごい！

小池 常雄…… 29

～小学校長がつなぐ地域のきずな

運営委員会委員長賞

家族新聞の発行

五條 彰久…… 38

再起は先ず足許から

印南 房吉…… 42

タケオの音楽と笑顔

新倉 書子…… 48

母の事故

かつや みつのぶ…… 50

がんだって、家族

吉田 亜沙美…… 57

最高の薬

大西 賢…… 64

わたしと「絆」

横溝 典子…… 70

きずなく天国のお父さんからの贈り物

伊藤 里枝子…… 77

下町の路地裏で…

佐々木 直子…… 83

育児を通じた親の成長

福井 聡…… 89

～育児休職という決断を通して

(東京都社会福祉協議会会長賞、運営委員会委員長賞は受付順で掲載しています)

家族力大賞 11 ～家族や地域の「きずな」を強めよう～資料

※作品の著作権は東京都社会福祉協議会に属します

家族や地域の「きずな」を強めよう

社会福祉法人 東京都社会福祉協議会 会長

古川 貞二郎

昨年は、東日本大震災に原子力発電所の重大事故が重なり、私たちがかつて経験したことはない、最悪の大災害となりました。しかし、そうした大変厳しい状況の中にあっても多くの人が自ら、それぞれの立場でできる活動をし、支援の輪が大きく広がっていきました。その姿をみて、私は、失われたようにみえた日本人のすばらしさを改めて実感いたしました。また、1995年から始まった、その年の世相を漢字一字で表す字として2011年の「今年の漢字」には、「絆」の一字が選ばれました。東日本大震災により、家族や地域といった身近でかけがえのない存在に対する絆を改めて感じたり、チームワークと信頼でワールドカップに優勝したなどしこジャパンの姿に感動し、勇気を得たり、多くの日本人が絆の大切さを改めて感じた一年であったことがその理由でした。

平成19年度から始めた「家族力大賞」。今年度の家族力大賞も、一昨年、昨年と同じように「家族や地域の『きずな』を強めよう」をテーマとし、自分の身のまわりでおこった体験談を募集しました。

多くの心あたたまる体験談が寄せられました。

孤立しがちな親子が気軽に集まれる子育て交流サロンの「場」として、ご自宅を開放してくださいっていた高齢者が倒れた際、地域の関係機関が連携しことなきをえ、それを機にさらに多世代の交流がひろがっていった話、若くして脳内出血で倒れ、在宅介護の生活になりながら、男性ヘルパーとの出会いに元気をもらい、家族もまたそれを機に固いきずなを築いた話、育児休職を通じて子どもとの深いきずなを築いただけなく、地域とのつながりをえた話など、家族や地域のきずなを考えるうえで、大変示唆に富み、ひろがりを楽しみな作品が多く寄せられました。

東日本大震災などを契機に絆の大切さが見直されている今、この作品集を手にした方々が、改めて、家族の「きずな」や地域の「つながり」を考える一助となれば幸いです。

東京都知事賞



大きな家族みたい！みんなの実家

藤田 房江

「事故です！今救急車で運ばれたので、すぐこちらに来てください！」

「みんなの実家@町屋」のスタッフから、私の携帯電話に用件のみの緊急連絡が入りました。

事故？利用者の赤ちゃん？お母さん？はたまたボランティアさんが具合悪くなった？はやる心を押さええながら、自転車を飛ばして現場に向かいました。そして、現場に到着した私は、家主であるチイ子さんが倒れ、救急車で運ばれたことを知ります。

発見者は、スタッフのひとり。開所時間前の11時ごろ、入口の鍵を開けようとしたら、ドアチェーンがかかかっていて扉が開かない。おかしい。毎朝、チイ子さんが開けてくれるはずの雨戸が閉まっている。大声で呼んでも返事がない。家に電話を入れても、応答なし。

これはタダゴトではない。チェーンロックとドアのわずかな隙間に手を入れ、やつとの思いで開錠。その後、住まいである二階にあわてて駆け上がると、ベッドの横であおむけに倒れているチイ子さんの姿を発見したのです。

いくら呼びかけても意識朦朧としている様子にスタッフは、チイ子さんをよく知る社会福祉協議会の担当者に電話連絡。すぐ救急車を呼ぶこと、冷蔵庫の赤い筒の中の、常備薬や緊急連絡先を記載したものを持って病院に同行すること、という指示を受け、救急車が走り出した直後の電話だったのです。

そんな経過を知った後、みんなの実家の二階の様子を見に行くと、ベッドのそばに扇風機のふたがいびつになって転がり、その上に倒れ込んだ形跡が残されていました。9月初めの残暑厳しい前日は熱帯夜。二階のどの窓にも網戸は一枚もなし。きつと、窓を閉めたままクーラーもつけないで、扇風機で涼をとりながら寝ていたのだろうと推測されました。

その後、遠方に住む娘さんが病院に駆け付けるまで付き添っていたスタッフが、戻ってきた時には、夕方になっていました。病院の先生によると、容態は今夜が山場だということ。区役所の担当者や社会福祉協議会、地域包括支援センターなどと連絡を取り合いなが

ら、安否を気遣う一日となりました。

そして翌日。熱中症と判明したチイ子さんは入院先の病院で意識を取り戻し、夕方には「おなかですいた！」と笑いがでるほど、元氣を取り戻すことが出来たのでした。

こんな事件がおこった「みんなの実家@町屋」とは、ボランティア団体が運営する荒川区の子育て交流サロンです。国の子育て支援拠点事業として、子育て中の親子が気軽に立ち寄り、赤ちゃんを預けたり、情報交換できる場所として位置づけられています。区内にある首都大学東京と地域住民が連携し、産後直後の家庭を訪問し、育児・家事のお手伝いをするボランティア団体を立ち上げたのが7年前。その活動の中で、孤立しがちな親子が気軽に集まれる場所の必要性を感じ、物件を物色していたのですが、なかなか適当なものが見つかりません。

そんな折、社会福祉協議会から、高齢者の一人住まいのチイ子さん宅の二階建て家屋の一階部分を貸してくれそうという情報を頂きました。荒川区も地域ボランティアによるこの試みを、財政的にも援助できるよう奔走してくださり、とんとん拍子に話が進み、「みんなの実家@町屋」が3年前に誕生したのです。

家主であるチイ子さんは、その頃、ご主人を亡くして一人暮らしとなり、ふさぎ込みがちな様子でした。それが賑やかな赤ちゃんの声が聞こえ、人の気配の戻った家となったことにより、徐々に元気を取り戻してきたのです。ご自身も別のボランティア活動にも参加するようになりました。私たちスタッフや訪れる親子連れとも気軽に声を掛け合い、見学者からは「ほんとうの親子みたいですね」と評されるような、親しいお付き合いが生まれ、利用する親子連れも増えてきました。

私たちの団体Ⅱ「35（産後）サポネット」という名前は、子育て家族を地域のネットワークでサポートしようという造語です。ご近所付き合いの希薄になってしまった昨今、地域の子育て力を取り戻そうと発足しました。首都大学東京で学ぶ学生ボランティアにとっては生きた学びの場となり、地域ボランティアにとつての生きがいにもなっています。この子育て交流サロンをオープンする話には、娘さんからも「母の安否確認にもなるので大歓迎です！」と応援されていたのですが、そのとおりになってしまうました。

このチイ子さん事件は、「みんなの実家」のような場所が、地域の一人暮らしの高齢者のためにも、有効に機能できるということを教えてくれました。今後退院して家に戻って

きたら、「毎日、二階にあがって様子を確認しよう」「安否確認メールを毎日、娘さんに送れないか」など、一人暮らしの高齢者を見守るにはどうしたらいいかと思いを巡らせていきます。

ともあれ、命の恩人！とチイ子さんに感謝されることになった「みんなの実家@町屋」。赤ちゃんから高齢者まで多世代にわたる地域の人々が集う、大きな家族みたいな小さなみんなの実家。立派な施設ではないけど、どこかほっと出来る、知り合いができる、みんなで助け合える。こんな場所が、町のあちこちに出来たらどんなに素敵なことでしょう。

これからも、ボランティアの皆さんに支えられながら、無理せず、楽しく、有意義に、この小さな取り組みを更に進化させていけたらと思うのです。

東京新聞賞



人は人とつながって元気になっていく

土屋 比佐子

長男の青朗は、5年前、脳内出血で倒れた。外資系の支社を切り盛りし、バリバリ働いていた。42歳だった。会話は出来るが片麻痺で左半身が動かない。支えがなければ独りでは立てないし、トイレにも行けない。障害1級、介護度5となり、人生のやり直しを余儀なくされた。

2年半の病院暮らしを経て、居宅介護の生活に切り替えた。そしてホームヘルパーの敏也君と出会った。敏也君が青朗に尋ねた。「青朗さん、ボクのこと、なんて呼びますか」少しの間があつてから、「敏やん」「アハハ、敏やんかあ、それがいい」若者同士の気安いやり取りがこのときから始まった。青朗は3、4分前の出来事も忘れてしまう高次脳機能障害を持っているが、敏也君の名前は早く覚えた。

今年37歳の敏やんは、アメリカ留学の経験があり、ギターやウクレレも弾く。利用者の間を洒落た自転車で駆け巡る日々だが、彼の言葉から介護への姿勢がみえる。「おれ、障害のある人や介護の必要な人を、特別な人とは思ってないんです。ただ、困っている人をちよつと後押しすれば、その人が独りで出来ることが沢山あるんじゃないかって思うんですよ」

車椅子の青朗が電車で敏やんと新宿まで出かけたときのことだ。駅員が付き添いの敏やんに行く先を聞く。彼はわざと聞こえないふりをしてケイタイを打っている。すると駅員は初めて青朗に聞く。そして「あっ、この人、喋れるんだ」と気づく。はじめ「障害者」が来たという顔をする駅員も、何回か行くうちに「あの人が来た」と覚えてくれる。こうやって、少しずつ障害を持つ人と他の人がつながっていくと敏やんは言う。

一般に「障害者」と言うくくり方でしか見られなかった人が、やつと顔を持った個人として認識されるようになる。そんな当たり前のことを敏やんに言われて初めて気づき、バリアーは人の心の中にこそ立ち塞がっているのだと分かった。

二人の年齢差は10歳で青朗が上だが、音楽とアメリカという共通項があり、つながりは

深まっていった。倒れる前の青朗は仕事の合間を縫ってフィリピンの孤児を支えるボランティア・グループで活動し、ゴスペルのバックでギターを弾いていた。アメリカに音楽学校仲間をよく訪ねてもいた。今も時折、音楽やアメリカの話をするのだが、青朗の話しぶりはポツリポツリで会話はピンポン玉のように流れない。会話には間が空き、聞く側はひたすら待つ。いつも注意深く耳を傾けている敏やんは、これぞというきっかけを掴み、会話は緩やかに進んでいく。

初夏のある日、青朗は敏やんと一緒にカレーを食べに出かけた。普通なら15分程の距離を青朗は1時間以上かけて車椅子をこいだ。移動するより休むほうが長かったようだが、敏やんは我慢強く付き合ってくれた。「立ち止まって休む時は、寄ってくる蚊を二人でおしえあってパンパン叩きながら進みましたよ」こう話す笑顔には、熱いハートで相手とながり、その場を楽しみ彼の人が柄が滲み出ている。

居宅介護の生活が始まって以来、青朗は週2回の訪問入浴を受けていた。室内にバスタブが持ち込まれ、自分の部屋が浴室に早替わりする。お湯の中に寝そべり、ビートルズを聞きながら身体を洗ってもらう。まるで王様のような。至福の時である筈なのだが、入浴

後、10分も経たないうちに、入浴のことをすっかり忘れてしまう。全てをスタッフにゆだねることは、記憶に残らないのだろうか。身体感覚なら間違いなく記憶に残ると思っていた私には衝撃だった。

そんな時、敏やんが切り出した。「青朗さんに自宅の風呂場でシャワー入浴をしてみよう」身長178センチ、体重75キロ。この大男をバリアフリーではない風呂にどうやって入れるのか。廊下と浴室の間には段差があり、入り口も狭い。コンパクトな団地だ。不可能だと誰もが思っていた。そこを敏やんの熱意が突破した。ヘルパーとして青朗の日ごろの動作を観察し、熟知した上での提案だった。もともとシャワーが大好きな青朗もすぐくやる気を見せた。後ろから支えられた青朗は右手で壁際の柱をしっかりと掴んで立ち、不自由な左脚を軸にして入り口の敷居をまたいだ。

取えてシャワー用の椅子をやめて、浴槽のふたの上に青朗が座る。いつもはぐらついていた上半身がピタッと決まった。胸をピンとはって安定している。右手だけでスポンジに石鹸をつけ身体をぐしぐしこすり、お湯をジャアジャア頭にかけて洗う。全て右手一本でこなした。

入浴の後、敏さんは眼鏡をはずし、汗をぬぐいながら言った。「青朗さんってすごく工夫するんですよ。シャワールの蛇口が床に落ちてしまうと、ホースを根元から手繰り寄せ口にくわえて引き寄せる。お尻を拭くために乾いたタオルを手渡すと、立ち上がって拭けないから、尻の下にタオルを敷いて左右に腰を振るんです。おれ、涙出そう！」ふき取る汗には涙がまじっているようだった。そしてついに、その日のシャワー入浴は青朗の記憶にしっかりと残った。

敏さんはしみじみ言う。「介護って作業みたいにする人が、意外と多いんですよ。介護する側には、自分で決めた手順どおりにやると効率がいいし楽なんです。でも手間ひまがかかっても、介護って本当は人と人とのコミュニケーションなんですよね」彼の中には介護する側とされる側という垣根はない。

この5年間に敏さんをはじめ、介護の分野で沢山の人に出会った。ケアマネージャー、リハビリ・クリニック、ケアセンターのスタッフ、地域の福祉担当者などに支えられて一歩ずつ踏みしめて歩くうちに、私にも明日は開かれているのだと信じる勇気が湧いてきた。独身男を介護する70代の両親は、自分達の加齢との闘いもあるが、新しいつながりの中で

元氣をもらい乗り切ってこられた。

さらに大きな発見があった。不幸と思われた出来事が家族全員を一つに引き寄せ、かっ
てなかった固いきずなを作りあげたのだ。倒れる前の青朗は、過酷なビジネスの世界でガ
ンガンに鎧を着て自分にも他人にも厳しく生きていた。優しさを失い、自己中心になりが
ちで、妹や弟にも避けられていたが、障害を持つ身となった今は、思いやりのある本来の
姿に戻った。ちよつとした世話にも「ありがとう」と言い、私がかくしゃみしても「大丈
夫？」と気遣い、ときには「お父さんとお母さんの子供に生まれて僕は幸せだ」と泣くこ
ともある。妹や弟も兄を気遣い仕事を休んで度々訪れ、青朗を囲んで笑ったり共に悩んだ
りしながら、家族が深く強くつながっていった。

いま、私は立ち止まり心の中の万華鏡を覗いてみる。介護職の人たちを含め、支えてく
れる様々な人たちの顔がキラキラと輝く。敏やんは中でもひととき強く光を放ち、青朗の
笑顔もそこにある。万華鏡の中は、なんと豊饒で安らぎのある世界だろう。私は、ふうつ
と深く息を吸いこみ、また歩き始める。

東京都社会福祉協議会会長賞



心の旅は音楽と共に

珠たまいきいきライフの会

生沼 牧子

私が音楽療法に出逢ったのは、50才を前にひた走ってきた人生をふと立ち止まった時のことだった。音大卒業後しばらく児童の音楽教育の場に身を置き、結婚と同時に退職。ピアノ教師をしながら続けていた介護が一区切りつき、その時の私は子どもから手が離れる寂しさを更年期の身体に感じていた。目覚めたきっかけは、ふとしたことから昔歌っていた歌を思い出し、同時にその頃の生活や場面、懐かしい人や自分の感情までが一瞬のうちに蘇ってきて、感動に包まれた体験と偶然聞いた日野原重明氏の講演だった。日本の音楽療法の創始者とも言うべき日野原氏のお話は大変興味深く、残りの人生、人の心に響く音楽に是非携わりたいと、何かに憑かれるようにして翌年日野原氏の開いておられた桐朋学園の社会人向け音楽療法講座に入学、1年間福祉やメンタルケアそして障害のこと、緩

和ケアのこと等必要な知識と技術を学んだ。卒業後は、その同級生と老人施設に音楽療法ボランティアとして通い、実践する中で、失語症の人が歌を大きくはつきり歌い昔を懐かしむ姿など、音楽には時を越え人の心を動かす力があることを幾つも体験した。

現在私は多摩ニュータウンの一角に住んでいるが、ニュータウンは特に高齢化が進み、団地の一室で一人暮らしをする高齢者は少なくない。その中で知り合ったある方(Kさん)がそうした高齢者の孤独・孤立・孤食そして孤独死の増加を憂い、そうした人達のコミュニケーションセッションの場として会話と食事を楽しむ「いきいきライフの会」を立ち上げられた。残念ながら最初の会は運営上の問題もあり休止せざるを得なかったが、病を得て余命幾ばくもないことを感じたKさんは、会の行方がどうにも心残りで、今度は音楽(歌)を用いて「歌声喫茶」のように音楽とおしゃべりの出来る会を計画、司会役兼音楽及び雑務担当として関わるよう私に依頼された。懐かしのメロディー、叙情歌、唱歌、シャンソン、ロシヤ民謡等々ジャンルを問わず好きな歌、懐かしい歌、思い出の一曲をリクエストして集った人皆で歌い、その時代に帰って共通の思い出を語り合い、個人的思い出に密かに浸ることに、現実を離れてよき時代を想い元気になる。歌の後の喫茶室でのおしゃべりで

は、仲の良い友と語り新しい友達を作って楽しいひとときを過ごす・・・そんな会は私の音楽療法の目指すところとも一致し、何よりKさんの命をかけた一途な思いを応援したいと思いい、父の介護をしながらだったが、一緒に会を立ち上げることにした。

その後Kさんは、愛唱歌を残し、会の発足1周年を見届けるようにして、親しい会員に看取られながらあの世へと旅立たれた。一人暮らしのKさんの世話をし病床の娘さんに代わって後のことを引き受けたのは50代〜80代の会員達だった。私も急を知らせる娘さんからの連絡で夜の病院に駆けつけ、Kさんのお好きだった歌を口ずさみハミングを繰り返しながらKさんを送ることが出来た。

現在、会は「珠いきいきライフの会」と名前を変え、登録会員は100名を数えて、毎回30を越える明るい歌声と共に温かいコミュニケーションを育んでいる。私はといえば毎回会員の皆さんの前に努めて笑顔で立って、皆さんの表情の変化を見、想いを感じながら、皆さんの心が柔らかくなるよう、季節や出来事そして歌の背景などを話す。リクエストを募り、その方の歌にまつわる思い出を話して頂いたり、私の思い出を話したり、時には独唱や男声合唱のお願いもする。座席は時々カードを使ってシャッフルし、話題に沿ってお

しゃべりタイムを設けて新しい方とのふれあいの場を作ってみる・・・と、その後のティ
ータイムはいつもより大きな輪ができていたりする。震災の後会場が使えなくなり再開し
た時も、多くの方が集われそれぞれの体験談に花が咲いていた。頼りになる運営スタッフ
にもお一人暮らしの方が多く、年齢は60代〜80代。お元気でそれぞれが楽しみを持って、
文字通り「いきいきと」活動して下さることが私の願いだ。

会では、活動の一環として「移動いきいきライフの会」と称し、年に何回か公園に出か
けて散策しながら歌ったり、老人施設や障害者の施設へ行き、集われた方を巻き込んで一
緒に楽しんでいく。コーデイネートする手間はかかるが、施設の方が喜んで下さる姿は、
会員の皆さんにとっても喜びとなつて帰ってきている。また年一回「いきいきと与生を楽
しむために」と題して様々な分野から講師を招き、市民に向けて講演とコンサートの集い
を開く。近頃は、会員の中から市の施設を利用して合宿に行こうという声もあり、受け身
ではなく自分の会として積極的に参加されるのが嬉しい。

私は、数年前より縁あって心の病を持つ方々の自立を支援する法人に勤めているが、そ
の中の1施設を「珠いきいきライフの会」が訪問したことがきっかけの一つとなり、法人

内にコーラスグループが生まれた。歌は言葉のいらぬコミュニケーション。年齢制限もなく親子、スタッフ、当事者の区別なくみんな参加できる会として、20代から70代の歌の好きなメンバーが集まり、世代を超え時代を超えて心温まる「いい歌」を選んで歌っている。精神的に肉体的に疲れた顔でやってくるメンバーも、歌を歌ううちに表情が和らぎ、お菓子係が配ってくれる甘いものと共にお茶で一息・・・帰る頃には柔らかい笑顔が戻っている。人数はまだ少ないしハーモニーもこれからだが、確実にメンバーの心の健康を育てていることが感じられる。これから輪の広がるのが楽しみである。

生きることにはなかなか難しく、過去は戻っては来ないが、音楽を通して人は昔に返ることが出来る。また勇気を得て跳ぶことも出来る。歌う仲間と思いい出や景色を共有し懐かしみ、楽しみ、個人的な秘めたる想いに浸って、リフレッシュし、明日の元気を得ることが出来る。

私は、音楽と共に、出逢った皆さんの心の旅のナビゲーターとして共に旅路を辿っていくことを、心から願ってやまない。

♪うたいつつ歩まん。この世の旅路を。(讚美歌の一節より)

漂流していた心

當間 舞

生まれながらの定めなら諦めもつきまします。しかし、不運にも起きた医療ミスにより失ったものは大きすぎます。私は小学一年生の時に大病をして、一年間の入院生活を余儀なくされました。その内、七ヶ月間の禁飲食の時期がありました。地獄のような日々が続きました。何度も生死の境をさ迷いましたが、現在の病院に助けられました。同時期に私と同じ病に侵され他院に搬送された男の子は、悲しくも亡くなってしまいました。

私は障害者一級に認定されましたが命は助かりました。医療ミスが原因で健康な体を失ってしまったことは、非常に悔しく、叫びたいほど腹がたちます。寿命は不明ですが、「体で負けるなら頭で勝負」と心に誓い、毎日を一生懸命に生きています。勉強はもちろん、作文や絵画等、様々な分野のコンクールに挑戦してきました。私にとって、表彰式に出席

することが自分自身への自信につながり、次へのステップになります。私が元気で生きることが、同じ病気を持つ子供達の目標になり、医学にも役立つと心して過ごしてきました。食事だけでは栄養不足の為、現在でも夜間に自宅で点滴と胃ろうからのミルク注入を行い栄養補給をしています。

学校に復帰してから今に至るまで、弱音を吐くことは許されませんでした。当初は養護学校に行くつもりでしたが断られました。私は内部障害でしたが条件に合わず入院前に通っていた学校に戻ることになりました。その学校に戻るには母が傍らで待機することが条件で、私は四六時中一緒に過ごしてきました。母はとにかく厳しく甘えは許しませんでした。健常者と同じでなければならぬと兄や姉と同じように、いや、それ以上に厳しく接してきました。世間からの目を気にしないよう、無意識のうちに強気を演じるストレス、常に母と一緒にいるストレス等が除々に留まり、心は真っ黒に染まっていきました。沸々と煮えたぎり爆発寸前だった時に、私を救ってくれたのが「そらぶちキッズキャンプ」でした。

そらぶちキッズキャンプとは、難病で苦しむ子供達が自分の体や治療を気にせずに元氣

で外で思いっきり遊べる施設のことです。この施設は北海道の大地にあり、沢山の方々のボランティアと寄付で運営されています。初めての両親から離れてのキャンプは、非常に新鮮で貴重な体験でした。そこで退院後、初めて同じ境遇の仲間と過ごしました。今まで母は、私が同じ境遇の子供達と親しくすることを決して許しませんでした。なぜなら、弱音や不満を言い合い、現状に甘んじ、心まで弱くなってしまうと思っていたからです。だから、いつも私は孤独でした。学校の友達はいませんが、病氣のことを相談できる間柄ではありません。

しかし、私は知っていました。母がお風呂でお湯の中に顔をうずめて泣いていたことを。母は私のために、あえて厳しくしていたのです。心が強くなければ、この先、生きてはいけません。病氣に負けない立派な大人になって欲しいという願いがあったのです。発病して七年経ち、もう十分頑張った、強くなったと思いい、キャンプに参加することを許してくれました。仲間と過ごした時間は、人生で一番楽しく幸せでした。ずっと一人だと思っていました。私には一人ではない、こんなに沢山の仲間が手を取り合っているのだと思うと、自然と涙が溢れてきました。私は開放感に満ち溢れていました。皆、懸命に生きています。

そして、病氣と向き合っています。そらぶちキッズキャンプで過ごした日々は、生涯忘れることのない、私の宝物です。

現在、私はピアニストを目指し音楽の勉強に励んでいます。キャンプで沢山のプレゼントをもらったお礼に、私はピアノの演奏をお返ししました。その際に、私は聴いてもらえる喜びを知りました。いつか、心から奏でた音色で人に感動を与えられるピアニストになりたいです。そして、コンサートをする為に再び北海道を訪れたいと思います。

両親は、私に病氣だからやらなくて良い、やっても意味がないなどではなく、病氣だからこそ私のやりたいことを後悔しないようにやりなさいと言ってくれます。とても嬉しく思います。しかし、周りの方々は、「病氣だから仕方ないよね。そんなに頑張らなくても」と甘く見て下さることが多いですが、私はそう思いません。病氣だからこそ健常者に負けないように、努力をして頑張らなくてはと思います。だから、私はピアニストになるために音楽を勉強しています。今思うことは、やはり病氣になったことは悔しくて諦めきれません。しかし、沢山の方々からの応援、あたたかい家族の支えがあるので、前へ進もう、頑張ろうと思えます。そして、感謝の気持ちで一杯です。

お父さん、仕事と私へのサポートをありがとうございます。

お母さん、沢山の時間を私に使ってくれてありがとうございます。

お兄ちゃん、いつも優しくしてくれてありがとうございます。

お姉ちゃん、小さなお母さんのようにいつも世話をしてくれてありがとうございます。

病気をしてから心から消えた言葉、今なら言えます。「ありがとうございます」

カブトムシはすごい！ ～小学校長がつなぐ地域のきずな

小池 常雄

「カブトムシを育てたい。」

小学校長のひと言が、私の休日をかえてしまうことになろうとは…。

それは、6年前の春先の事。「校長先生から電話があつたわよ。」…と妻が言う。

夜遅く帰宅し、こんなことを言われた私は目を白黒。「何も悪いことはしていないが…」と半ば警察から電話を受けたような気分。

息子も娘も卒業して時間がすぎ、小学校は縁遠いものになっていた。その校長先生が、単なる地域住民の私に何のご用か？と思ったのが、率直な感想だった。

久々に小学校に足を運べば、保護者が20人ばかりいたろうか。先生は何をやりたいのか、

何を手伝ってほしいのか、なかなかおっしゃらない。しばらくお話を聞くと、どうやら地域と学校が連携した課外授業のような活動で、ビオトープを作りたい、カブトムシを育てたい：というお気持ちだということは理解できた。

されど、私の職業は建築士。仕事として小学校や企業研究所片隅のビオトープ作りに関わっているが、どうもカブトムシとビオトープはすぐには結び付かない。またも目を白黒。お話の後、校内を案内され、カブトムシの幼虫をたくさん見せられた。ずいぶん暖かくなり、蛹化の時期も近い：と子供のころから生き物好きな私は心配になった。息子が小学生のころ、カブトムシを育てたこともあり、自分のほうが世話をしたことも、懐かしく思い出された。先生は校庭の隅にある古い水槽に幼虫を放したいと言われる。これは水はけが悪く、水分のコントロールなどなかなか容易ではなく、条件が悪い。

ここで頭をもたげたのは私の建築士としての本能のようなものだったのか：と今になれば、思う。仕事でいくつも小学校の設計に関わっても直接小学生と関わることは無い。自分自身、心の中に不満があったのかもしれない。

あわてて、廃材をもらいに走り、翌月集まった日曜大工もしたことの無い親たちの手を

借りて、カブトムシ御殿（第一御殿・前期）と呼ぶ飼育小屋を作ることになった。なぜ御殿かといえば、立派…という程の意味。ツノ型の棟飾りも2つ付けた。

これは設計者として、全く初めての経験ばかり。なぜなら、設計事務所は何をつくりたい（仕様書・要求）がまずあり、次にお金（資金）と、作ってくれる人（施工者）と、時間（工期）とがあって仕事になる。

今回はこれらの全てが、なにもない。

図面など書いても役に立たない。手書きの図面は作ったが、もらえる資材が十分でなく、絵に描いたモチ。まさに現場合わせ。もらってきた廃材を現場で寸法順に並べて、作れるもの大きさを決めるといふ建設作業となったのだから…。来てくれたお父さんたちに、電動ドリルの使い方をお教えることから始めることになろうとは…。

その後、「つくし野小ビオトーププロジェクト」と名付けられた活動は、校地がせまく、丘の上で水場がない立地条件のもと、地域と小学校の連携を模索する中、ビオトープの考え方をよりどころに「親と子の環境学習活動」といった形に収束し、さまざまな生き物や

環境に関わる学習活動を展開することになっていった。

カブトムシはすごい。

子供も大人も、老若男女、カブトムシと聞くと嬉しそうな顔をする。単なるPTA・OBの私に、保護者や地域の人が次々に手を貸してくれる。カブトムシが人のきずなをつなぐ。小学校長は更にすごい。

地域の誰もが疑わない。お寺が土地を無償で貸してくれることになった。お寺の柿を子供たちにとらせてくれる。学校にカブトムシやザクロを届けてくれる人がいる。農家は作物の栽培指導をしてくれる。トラクターで畑を耕してくれる。このトラクター、子供たちに大人気。運転席に乗せてもらった写真は市の広報紙のトップを飾った。小学校長が地域のきずなをつなぐ。

校長先生は、子供たちに、「いのち」に触れさせたかった…とおっしゃる。今は「いのち」を知らず、子供たちが大人になっていく。

私が子供のころ味わった魚とりや焚き火、木工作、生き物を育てる、森の中で遊ぶ…といった自然体験を今の小学生は経験していないのではないか？我住む街の子供たちが生き

物や自然の事物、環境とのかかわりが貧弱なままに受験に突入し、大人になってしまっ
いいものだろうかという私の思いもあった。

その後の6年間の活動で、正式な活動だけでもすでに65回を越えた。焚き火、ヤゴの救
出、森遊び、カブトムシの飼育、川遊び、ホタルの観察、地域自然観察ハイク、鳥の餌台・
巣箱作りと校内への設置、メダカ池・トンボ池の整備、キノコ園の設置、活動報告看板の
設置、校内への掲示…と活動の幅が広がっていった。お寺に借りた畑でいろいろな作物を
つくり、収穫し、たき火で食べる食育にまで手を伸ばした。

大学との協働も実現した。専門家のお話を聞かせたくなり、友人の大学教授にお願いし、
出張科学教室まで開いてしまうという暴挙まで成し遂げた。

参加者数も年々増え、月一の活動は毎回40〜160名と安定した。年間の総参加者数
は1000名を越える。これは児童のみならず、保護者に活動が認知され、継続して支援
してくれるメンバーがいるからだ。そもそもこの種の活動に対する潜在的ニーズが強かつ
たのではないか？校長の呼びかけは、保護者や児童、地域のニーズをとらえ、地域のきず
な、教育力を引き出していた。

実は校長の手によって、この市の2つの学校に同じ種がまかれていた。同じ教えだが、それぞれ別の発展をとげた。

もう一つは校長の前任校で8年の歴史を持つ「鶴川二小おやじの会」。こちらは生き物系を中心に本格的ジオトープ作りを模索。4年前から、相互に活動プログラムの交流とコラボレーションが始まった。

最大のもののはかぶとむし相撲（町田場所）。初年度は市制記念行事とからめて市内の小学校から参加者を集め、トーナメントで団体優勝などを決める。相撲のルールや土俵づくり、運営方法などのすべてが模索の中、手作りで進んだ。

当日、会場の体育館で、各校から集った子供たちが、自分の分身「カブトムシ」に思いを託して対戦する。男の子も女の子も、6年生も1年生も同じレベルで戦える。力任せで元気な男の子より、ソフトに扱う女の子や1年生が操るカブトムシが好成績を収めていく。「どこか被災地の子供たちと交流することはできないか」…との同校校長の思いのもと、今年も震災被災地とカブトムシを通じての交流への模索が始まった。インスタントコーヒのあきビンを利用して作った「カブトムシの幼虫観察ビン」を被災地の子供たちに届け

る活動で被災地との交流を図りたい…というプロジェクトも検討中。更に、板材を利用したコンポスト「バクテリアポキエーロ」を共に作る支援活動にも協力し、被災地発の地球にやさしい新しい暮らし方の発信を模索している。

かぶとむし相撲町田場所の開催には、地元商店や自治会に協賛を依頼し、地域住民や大学生などの協力してくれる方々に対して、「鶴二おやじの券」という名前の地域通貨の実証実験を始めた。カブトムシの力で地域おこしと小学校相互、地元自治会との交流が拡大していく。今年度から2年間にわたる助成を受けて、NPO法人化まで視野に入れているという。

自宅から出かける時、妻が私に言う、「校長先生に遊んでいただいてきなさい。…」と。50代のおじさん（私）が貴重な休日を見守りや地域のために費やす神聖なボランティア活動に対し、「遊んでもらう」とはあんまりだ…と思う、が、いやいやなかなか本質を突いている。

「校長先生、これからも私たちと遊んでください。」

運営委員会委員長賞



家族新聞の発行

五條 彰久

平成十八年七月に、母が九十六歳で亡くなった。母が存命中は、兄弟（六人）夫婦や孫が中心となって、介護を通してわが家の絆が強固に保たれていた。しかし、一周忌の法要の日にだれからともなく、家族の中心の軸がなくなっても、昔ながらの家族の輪を大切にしたいとの意見が出された。正月二日には全員が、長男の私の家に集まること、永年の習慣になっていた。しかし、年ごとに子供や孫が大きくなって欠席する人も増え、消息がよく分からなくなってきた。われわれ兄弟夫婦が十二人。その子供夫婦が二十三人、孫が十八人という計五十三人の大世帯であるから無理からぬことである。

母がいなくとも正月の顔合わせはできて、孫の成長は意外とわからず、入園、入学、卒業、就職と知らぬ間にやってきて、消息が入ってこなくなりつつあった。

そこで、母が可愛がっていたひ孫（兄弟の孫）を登場させる「家族新聞」を私が発行することにした。その名は『五條ファミリー』とし、第一期は孫十八人を毎月紹介したら終結することにした。新聞は私が七十歳から独学で覚えたパソコンを使って編集し、二〜四頁のA4判カラー印刷とし、もちろん無料で各世帯に発送した。私にとってはボケ防止にもなり、原稿依頼で初めて甥や姪に電話することもあり、楽しい作業であった。

まず孫は小さい順に掲載し、めったに会うことがない遠い北海道に転勤になった家族を紹介した。本人たちが話題の中心となり大変喜んでくれた。また兄弟夫婦の入院生活を紹介し、お見舞いに駆けつける家族もあった。私たちが戦争で疎開した親父の実家の古い写真を掲載し、戦時中の厳しい生活を引き抜いてきた親たちの苦労の跡も綴った。

この『五條ファミリー』を通してお互いの親睦を深めるうち、私の二女が中心となり「いとこ会」が結成され、若い者同士で旅行、キャンプ、クリスマス会、忘年会、カラオケ飲み会などが開かれるようになった。この会には妻の兄弟の子供も参加した。勿論、催しには会費を出せば親たちの参加も大歓迎である。当然、その様子は写真付きの原稿を送って貰い本誌に掲載し、盛り上がりを見せた。また、個人で活躍しているピアノ演奏会の様子や、

マスコミに紹介された孫たち記事なども掲載し、意外な才能の持ち主がいることが、発見でき読者を驚かせた。

本誌を通して私が呼びかけたひとつに、毎年、兄弟が続いている兄弟間のお中元・お歳暮の廃止であった。ほとんどが年金生活者になったのを機に思い切って「虚礼廃止」の提案を実施することができた。勿論、千葉県の旧農家に移り住んだ弟のように、庭でできた野菜など、家庭で作ったものを贈ることは自由であり、大歓迎である。私はキューイフルーツを毎年二百個以上作って希望者に送っている。

本誌は、予定通り十八号（十八か月）を持って、2009年に一時休刊した。その後私は妻をガンで亡くし、すぐ脊柱管狭窄症となり、杖を突いての歩行になってしまった。しかし、妻が残していった愛犬「たく」との二人？生活となったが、リハビリのつもりで散歩だけは続けている。また、母が死ぬまでお世話になった特老ホームの『家族の会』の顧問をボランティアで五年経った今でも続けている。その機関誌には毎号老人を元気にするエッセイを掲載させて頂いている。

いま一番残念なのは、妻の追悼号が発刊できなかつたことである。休刊後二年が経過し

たが、成長する孫たちのニュースは無尺蔵である。来年妻の三回忌には新たな企画で『五
條ファミリー』の復刊を是非実現したいと思っている。

親族の絆を深くすることは、こどもや孫が成長し、他人との絆を深くする原動力になる
ものと信じている。

再起は先ず足許から

印南 房吉

杖をついてバスに乗ったらパッと席を譲られた。若いスーツ姿の人で礼を云うと、へナニ、ナニと胸の前で小さく手を振って出口の方に行って仕舞った。ホッと有り難かった、同時にオレも歳だなと感じた。

五十年程前に事故で左脚を失った。大変な衝撃だったが、生きる努力は当然の事、毎日の厳しいリハビリと義足の歩行訓練中に

「これで杖をついてちゃ働き口が無いぞ」と今になると望か妙な依怙地から杖無しで押し通した。これが良かったのかどうか、多分この強情さで生きてこられたとも思えるが其の酬いか、背骨が横に曲がって神経を圧迫し身体を支えて来た右足が典型的な坐骨神経痛で脚を一步前に出せなくなった。今更なんでこうなるのと云っても始まらない、子供達が

皆で「お父さん、強情も程々にしなよ」と最新の杖を買って来てくれた。ガツシリした金属製の三つ折れで長さも微調整出来る所がいいと捻っていたら子供に「お父さん、杖はつくもんだよ」と云われ早速ついてみた、歩けた、途端に世の中がパツと明るくなった。丁度白内障の手術をした翌朝、眼帯を外した時の感覚である。

「よし、これで人生もう一度だ」と外出しバスで席を譲られたのである。人の親切が文字通り身に沁みた。

小学校四年の時、父に何かで叱られた序に

「他人の痛さを知れ」と云われた記憶がある。

「身体が別なんだ、人の痛さが判る筈ないよ」と心中、小生意気にも反撥して父が何故人の痛さを云ったのか判ろうとしなかった。父は明治の人で三男坊、生来の虚弱もあって実家の漁業を継げず小学校卒業と同時に銚子から東京浅草の砂糖問屋に丁稚奉公した。其の頃の砂糖は高級食材、将来有望と胸を膨らませたが、実際には五十キロもある砂糖袋を担ぐ重労働に忽ち腰を傷めて寝込んで仕舞った。揚句「たるんでっからだよ」と一喝され腰の痛さと屈辱に涙を流した。此処で一念發起、居職（座ってする職人）になろうと考え

店の上客が皆洒落た洋服を着ているのに気付き

「洋服こそこれからの商売だ」と決心、転向した、父が一人で必死に選んだ新人生である。

「身体使えば汗が出る、頭絞れば智慧が湧く」父の教訓の一つ、此れはよく判った。その後十五年間懸命に汗してやっと小さいが自分の店を持てたのに大正大震災でアッサリ丸裸、然し、負けなかった。跡地のバラックで早朝から深夜迄、父母共々に足踏みミシンを鳴らし続けた。下町の立ち直りは意外に早く食と住がそれなりに落ち着くとサテ勤め人は服が要る。そこで父なりに顔と智慧を働かせて大量の既製服を後払いで集めて店前に吊るすと共に張り紙をした。

「お客様のお身体に直ぐ合わせます。月払いで結構です」文字通りお互いさんである。此れが大当たり、当時既製服はツルシンボーと安物扱いだったが袖丈、ズボン丈を身体に合わせて明日の朝から勤めに行ける、此の時のお客さんが其の後のお得意様になってくられて服を作る時は無論、ご新規さんを連れて来てくれた。口にはださねど流石下町、父は此の時の力いっぱい毎日を

「仕事はお客さんとするもの、足元から」と云って大切にしていた、再起の第一歩である。

障害のある人は千差万別、一括して云えるものではないが、自助努力無くしては歩けず、杖と共に周囲の人達と腕を組まなければ生きていけないと知った。杖で再び元気になった所で今住むマンション内に老人クラブを作ろうと思い立って呼び掛けた。八十世帯、若くて元気に働く夫婦が多いが時折り杖の人も見掛ける、それこそお節焼きかとも思ったがマンションも小社会、やってみた。何と十七人も集まった。杖の人五名、独居高齢者三名、夫婦とも身障者手帳をお持ちの方も居て

「今迄心細かった」、「こんな会が欲しかった」「私だって未だお役に立てそう」等々、同じ志を持つ人達は直ぐ打ち解ける。意見経験様々にその場で出し合って出発を決めた。

先ず会の名称を『おげんき会』、会費月百円、代表を私、会計、総務担当も直ぐ手が挙がって会の目的を「相互扶助その他」として次回に具体的な行動を決めようとなった。念の為にマンション自治会に話を通したら賛成、活動費まで援助してくれると云う。成る程此処にも社会が生きていた。行動を起こせばそれなりに周囲が支えてくれる。次の会合で報告したら一同感激して

「ならば我々も社会のお役に立とうではないか」となった。サテ何から始めるか、色々

な話の中で私から先日来気になっていたい杖の足袋を持ち出した。近所のN病院では、玄関でスリッパに履き替えるが、杖は土足の俣である。うん、杖にもスリッパ、これから始めよう!となったら直ぐ佐藤さんが

「それなら任して、丁度孫のソックスを編んでるのよ、ピンと来たわ、私作って見る」と、早速出来上がったのが《杖ソックス》、玄関を上がる時杖の先にちよいと履かせる可愛いソックス、これなら着脱簡単、洗濯OK、N病院で使ったら周囲の人の目が和んだ。気遣いのメッセージである。病院ばかりか授業参観や音楽会にも有効だろう。皆で使えば拡まるぞと楽しみである。父の言葉通り先ず足許からが生きた。

時々来る孫の一人、たくみ二十二才、K大在学に此の杖ソックスを話した。ふーんと聞いていたが私の亡父の《足許から始めよ》を持ち出すと深く頷き

「今、被災地(東日本大震災)の幼稚園再開の手伝いに行く話があるんだ」と云って帰った、後日その感想文が届いた。

一読、その真剣さに心を打たれた。福島県いわき市の幼稚園に七名四日間、チームを組んでの再開活動のドキュメント風感想文集だった。K大特に藤沢キャンパスは入るのも入

ってからも凄まじい競争社会と聞いている。其の中で研鑽している若者チームを組んでの被災地支援である。何をどう感じ行動したか生の声が叫んでいた。アトランダムに並べる。

《一望のガレキ、凄い！テレビで見るとは大違い、何処からどう手をつけるのか茫然》

《これだ！祖父の云った再起は足許から！》《足元の石を持った、此処から道が開けた》

《園児の母がポツリと云った、私達はもういいんだ、此の子達の放射能を直ぐ測って！》

《園児達との交流と云ったって？そうだ絵だ、黒板に踊るタコさんと大口開けたブタさんを描いたらみんな一斉に真似した、大笑いした》《庭の端のヒマワリ五本、子供達とそっくり》《チームって素晴らしい、明日もやるぞ》

此の七人、何が有っても前進するだろう、頼もしい限りである。

タケオの音楽と笑顔



新倉
書子



タケオはこの世に生を受けた時にアクセシビリティがあり、ほとんどの人が備わっている能力が劣っている。

日々の生活の中で出来ないことが多く、不自由ではあるが、タケオ自身は他の人が特別視するほど違った人（ダウン症という障害者）の意識はない。

歌ったり、踊ったり、走ったり、泳いだり、絵を描いたり、なんでもしたいし、する。

この時、その瞬間を精一杯、ひたむきに生きている。

タケオは音楽が大好き。音に体が反応し、体中で音を楽しむ。サバールやジャンベ、ピアノ、マリリンバを自由に奏でる。

そして、一緒にジャンベをたたき、輝き、興じる仲間がいる。共感する友がいる。

10年前より演奏活動をはじめ、タケオにしか出来ない、タケオだから出来るコンサートを各地で展開している。

日本全国、世界にタケオのピュアな太鼓の音が響く。

エネルギーが爆発する。

タケオの音楽と笑顔が人を集め、人と人をつなぐ。

タケオの周りは笑いがいっぱい。

生きる喜びが満ち溢れている。

母の事故

かつや みつのが

はじめに…

あまりにも悲劇的な3月11日の東日本大震災と福島第一原発事故を経験し、私たちのなげない「あたりまえ」の日々が何一つとして「あたりまえ」ではないと知った。天災は突然やってくると言うが、年度末で、新たな4月に向かって各自が希望に胸を膨らませていた「あの日」、日本国民にとつてまさに晴天のへきれきであった。そのショックから立ち直れない中で、今、新たな日本造りが始まっている。お互いに励ましあい、自分のできることを精一杯やり始めている。福島県四ツ倉で生まれた私の心には、「フクシマ」再生支援が、今後の人生のテーマになると思う。

ちょうど同じような経験を我が家も経験したので、ここに記録しておきたい。母の自動

車事故。それは平凡な日々を当たり前のようにおくっていた我が家には、驚きであった。そして、この事故を通して、家族の新たなきずながより強く、太く結ばれた。母の事故…

リリン、リリン

「こちら警察です。K子さんは、そちらにお住まいの方ですか？」

突然の警察からの電話。いったい何かと思った。

「K子という者はいません。N子のことでしょうか？母のことですか？」

「事故にあわれました。自動車にぶつけられて、○×病院に搬送されました。ご家族の方、至急、病院に来てください」

急いで病院に行くと、あちこちが腫れ上がり、青アザの顔をした、母とは思えないほど姿の変わってしまった母が救急車で病院の集中治療室に収容されていた。

普段はめったに行き来しなかった弟家族と我が家の家族が、母の事故で集中治療室のベッドに全員そろった。すっかり変わってしまった母の姿に、皆がショックを受けた。

気を取り戻した母は高次機能障害という症状で、家族を認識できなかった。意識はある

のだが、話はつじつまが合わないし、私たちがだれなのか、全くわからなかった。

ただ、いなか育ちであったため、肩も手首も肋骨も腰も折れているといわれたが、比較的軽症のようで、3週間後に普通病棟に移った。それでも、あいかわらず私たちがだれかわからないで、幼いころの自分の兄弟姉妹の名を呼んでいた。車椅子に座らされ、勝手に動かないように車椅子に固定されたエプロン姿の母は、幼稚園の幼児のようであった。

医者も看護師も親切で、全てにベストをつくしてくれた。何もわからないで、めちゃくちゃな要求を突きつける母を、怒ったりしないで、看護師の皆さんは細やかに世話してくださった。

家族各自が時間をとって、毎日、お見舞いに行った。「たくさんのご家族に良く来てもらって、幸せね」と看護師さんたちに言われていた。兄弟家族が、本当に何でも話し、協力した。家族がこれほどやさしいとは、おどろきであった。

「どうしたのかしら。何もわからなくなってしまった！」そうつぶやく母にだれからもなく声をかけ、手を取り、抱きしめ、髪をセットし、食べさせ、トイレを手伝い、風呂にいった。我が家族は、こんなに優しくかったのだ。

新発見であった。今まで知らなかった家族の優しさを知った。こんな不幸な事故の中で、初めて知った「優しさ」であった

複雑な家庭構成なのに、家族としての長い年月は、我々を「家族」にした。不幸が不幸のままではなく、逆に幸福を見つけるカギになった。この優しさがあれば、これからの長い介護も乗り越えていける気がした。

記憶回復のために、家族全員が持っている力を發揮した。まず、妻が、飼っている猫「ノラ」の写真を額に入れて、母の枕元に置いた。甥が母の日常生活の写真集を作って、毎日見てもらうようにした。「ここが台所」「庭の花」「家の前の通り」と、1枚1枚説明した。母の好きな音楽をカセットで聞かせた。面会時間には、好きな食べ物を持っていった。

そして、毎日、家族全員が自由に書き込める日記を置いた。これは宝物となった。記憶回復にとっても良い効果があった。「かあさん、覚えていない？」と問う家族に、母は「こんなことがあったの？へえ〜」「こんなことがあったの？へえ〜」と、日記を読み、毎回同じ質問をしていた。

医者が「このまま帰宅させても、介護が長続きしない。退院は無理です」とおっしゃっ

だが、このまま長期入院しているとボケて廃人になってしまうという危機感を感じ、五カ月後、リハビリをある程度終えた段階で退院させ、自宅にもどった。

弟家族も集まって、誕生会をかねて、大パーティーを開いた。それでも、家族の名はめちゃくちゃで、家族を認識できないようであった。しかし、本当に少しずつ少しずつであるが、1人1人の名を正しく呼べるようになった。各自の名を正しく呼んだ。それだけで、家族は大喜びであった。こんな小さなことが、幸せに感じた。まさに、メーテルリンクの青い鳥であった。

家族の認識もできないまま、医師の反対をおしきって退院した時、入院からずっと家族全員が自由に書きこめる「家族日記」は三冊になっていた。退院後、大きな読みやすい字で書かれた「家族日記」を何度も読み返しているうちに、母の過去の記憶が蘇ってきた。

日記には、幼稚園生にも理解できるようにわかりやすい言葉で「N子の子供は二人います。長男はM男です。次男はS男です。M男の子供はTとNです。二人とも会社に通っています。」「家は、江戸川区T町にあります」「今は春です」「今日は○日火曜日です」というように書いてあった。

「家族日記」は、孫たちの愛情で満ちていた。孤独な老人の多い今の世で、これほどまでに慕われる母は、しあわせ者であった。同時に、このように母を囲める家族である私たちも幸せであった。

次第に子や孫の名前を呼べるようになり、乾いた服やタオルもたたためるようになった。よろよろしながらも帰宅して、家に住み、猫にえさをやり、玄関を掃き、自分のできることを精一杯やることで、おどろくほどの回復を得たのだった。

弟が有給休暇をぎりぎりまで取り、通院と行政への申請を一手に引き受け、車椅子の母を連れていってくれた。あれからちょうど2年が経過した。初めは、自信が無くて、どこまで介護を続けられるか心配であった。しかし、昔と違って、行政や民間の支援制度があった。

きざみ食の弁当配達、レンタルベッド、デイケア、ヘルパー、ショートステイ、手すり設置など、さまざまな福祉制度を利用しながら、家族の優しさを分け合っている社会になった。福祉関係者には、本当に感謝している。母のおかげで、本当に家族一人一人の心の温かさを知った。

結論…

多分、人生の中で、不幸な経験のない人はいないであろう。その中で「やさしさ」を知るのでろう。寒い雪の中で、踏まれるほど太くたくましくなる麦のように、不幸を乗り越えて、知恵を出し合って、助け合う中で私たちもたくましくなっていく。我が家も、この体験を大切にし、明日へのかてとしていきたい。

『がんだって、家族』

吉田 亜沙美

「あさみちゃんのお道具箱、みんなとちがってすごーい！かっこいいね」「パパが作ってくれたんだよ！」空き箱に金ぴかのおりがみの切り絵で、チョウや昆虫をあしらった手作りのお道具箱を見て、クラスの友達が集まる。幼稚園の新学期、入園してから1年もすると、使い古したお道具箱を学期の変わり目で買い換える園児は多い。私の家は、そこそこの収入もあったし、決して節約家だったわけではないが、昔から『モノ』をなんでも買ってもらえるような教育方針ではなかった。だから、新しいものを買う前には「なぜ必要なのか」「工夫すれば買わなくてもいい方法があるのではないか」という考え方をすることは、自然と身につけていた。「うちのパパはすごいんだよ！」空き箱でできたお道具箱を持ち、幼少の私は、得意気になる。

小学生になっても、私のパパは自慢のパパだった。図画工作の授業で使う工具や材料は、なんでも持つてること。電器やドライヤーが壊れたら、修理して使えるようにしてくれたこと。営業マンで、いろんな人と仲がよくって、いろんな友達が遊びに来ること。たまたま流れていた超能力のテレビを観ていたら、スプーンだって曲げられたこと。

ある日の授業中、そんなヒーローだったパパが、会社で倒れたという知らせが入った。「脳卒中」。そう言われても当時小学4年生の私にはよくわからなかったが、親族が深刻なムードになるほど命が危険なのだということだけはわかった。

それでも入院生活を経て、父は会社に復帰した。しかし、脳には腫瘍を抱えており、いつ発作を起こすかわからないという危険を抱えながら生きていくこととなった。手術をしたも、完治すると言い切れるものでもない。父は「手術で万が一良くない事が起こって、一生植物状態になって家族に迷惑はかけたくない」「家族を守りたい」という思いから、治療よりも『がんととの共存』を決意したのだった。末期患者が考えを巡らせ選んだ、自宅療養という手段である。

その日から、私たち家族と「がん」との生活が始まった。共存といっても私たち家族は

闘病とか奮闘とか、そういう雰囲気ではなかった。当の本人が、病院の懐中電灯を使って暗闇で自分の顔を照らし、おぼけの真似をして笑いをとつちやうような人なんだ。吉田家はいつだってユーモアを忘れない。

脳内に爆弾を抱えた父は、何度か発作で運ばれることはあったが、自宅で安定した生活を送っていた。晴れた日には散歩に行き、地元の直販野菜を買い、趣味で仏像彫刻を始めた。

時は過ぎ、私は大学を卒業しようとしていた。就職難の日本。どうしても叶えたい夢がある私は、就職先に収入や安定だけを求められず、みんなよりも早く就職活動を始めたのに、なかなか内定が出ずに面接を受け続けていた。そんな秋ごろ。また父が発作を起こした。都内の大学病院に搬送されたが、脳内はすでに出血で圧迫。お医者さんも「成す術がない」という状態となってしまった。家族は当番制で病室に泊まることにした。最初は私。昏睡状態の父が暴れて、酸素マスクを外さないように一晩中見守り続けた。夜が明けて、入院最初の朝、お医者さんから、「今夜が山かもしれない」と、たった一人の時に告げられた。昔からお節介なくらい面倒見が良くて、人付き合いの広い父だったから、友人が友人を呼び、病院には多くの人が父に会いに来てくれた。キャンピングカーで病院に来た友人は、

交代で泊まる私達が使えるようにキャンプ用の寝袋と歯ブラシセットを持って、独学で代替医療の研究をする友人はマッサージをしに、元同僚の友人は手作りの温かいおにぎりとお味噌汁を持って。いろんなジャンルの個性豊かな友人達が、それぞれの持つ得意分野で協力して、私達家族を支えてくれた。意識はないが苦しそうに必死で呼吸をする父のベッドの周りで、みんなが父の名前を呼ぶ。

病院は、完全看護ではあったが、枕の微妙な角度の好みやタオルの位置など、長年一緒に過ごしてきた家族でなければわからない配慮をするために、私たち家族は交代で父に付き添った。妹は病室でテスト勉強。私は企業の最終面接に病院から直接参加したりもした。数日間、声をかけ続けたある日、奇跡が起きた。床ずれを起こさないように定期的に父の体位を換えに来る看護師が体位変換をして、その時病室に居た妹と私が枕の角度を微調整した時のこと。父はうつすら目を開け「ありがとう」と言ったのだ。妹と私は驚いて、必死で話しかけた。父の友人にも沢山連絡した。駆けつけたみんなで何度も何度も、あだ名や名前でも父に声がけを続けた結果、なんと父は意識を取り戻したのだ。医学的には「この状態で生きているのは本当に奇跡としか言いようのない状態だ」とまで言われ、家族や

友人との強い『絆』は、病気や医療の常識を超えられるのかもしれないと実感した。

父は退院し、再び自宅での療養生活を送れるまでになった。しかし、これまで以上に言葉がうまく出てこないことや、歩ける距離が短くなるなど、がんの進行による「できないこと」が日々目に見えて増えていった。2階に登るのがやっとになり、建築家で独立した父の友人が、手すり工事をしてくれた。妹は学生・長女の私は社会人・母はパート。日中はデイサービスを利用して働きに出て、夕方は誰かが帰宅して必ず付き添う。私達家族は、着替え・入浴・食事の介助を付きっ切りで行った。たとえ言葉が出なくても、コミュニケーションは取れる。母は100円ショップでホワイトボードを買ってきて、父が伝えたい事、家族の会話を最期まで大切にしたい。父もそれに応えるようにボードや身振り手振りで、私達との時間を大切にしてくれた。

日に日に進行する症状。趣味の仏像彫刻をしようにも、手がうまく動かない。自宅療養は常に一緒に居られる分、ちょっとした異変がわかってしまい、精神的には辛いものでもあった。それでも「がんと生きていく」と決めた父と、私達は諦めなかったが、女3人での、男性の介護には限界が出てきた。家族は、話し合いの結果「温泉に行きたいね」と言う父

と一緒に温泉に行った日を最後に、リハビリ入院という形で2週間入院してみようという決断をした。最初のリハビリは順調で、このままもつと歩けるようになるかもしれないね、なんて言っていた。しかし、数日後食事をしながら意識が遠のいてしまった父は、そのまま天国へ行ってしまった。彫りかけの仏像。「帰ってきたら続きやればOK」と私、「OK」と父。ホワイトボードで交わしたその会話での願いは、叶わぬものとなった。

それでも、私達家族はすぐに、前を向くことができた。なぜなら、沢山の友人に支えられていたから。あらゆる手を尽くし試せる治療は全部やってみたこと。ケアマネジャーさんや地域の介護施設の協力のおかげで、父らしい介護生活が送れたこと。病院でもユーモアを持って私達を笑わせてくれた父が身をもって教えてくれた家族の『絆』の大切さ、『感謝の心』、人を想って生きてきたからこそある『協力してくれる友情』。その全てがくれた、家族で過ごせた時間に後悔なんてない。53歳で生涯を終えた父だったが、ぎゅっと凝縮した人生を父は生き抜いた。だから私達家族は、悲しみよりも感謝の心でいっぱいなのだ。

いま私は、病室から直接会場に向かって受けていたあの時の会社の最終面接に無事合格し、働いている。現在は、父のような人望の厚い営業マン目指して奮闘中だ。会社では、

各自自治体に監修となってもらい無料配布する『介護と予防』に関する、冊子を作成する部署に自ら希望して異動した。冊子は市役所などで配布していただいている。

介護保険の申請や介護サービスの種類・利用の仕方・地域にある施設一覧を一冊にまとめ、わかりやすく解説したのがこの媒体だ。私はこの冊子を、もっと読みやすく改善する提案や、利用者が本当に知りたい情報を盛り込むための企画をどんどん提案している。

今はまだ社会人2年目で、その冊子を無料で配布するための「協賛有料広告」を募る飛び込み営業をしているが、自身の介護生活で得た経験に、無駄なことなどなかったと日々感じている。いつか自分でもリーダーとなって、この冊子を日本一の媒体として広めたい。そして、一人でも多くの家族が、介護保険や地域の施設を有効に使い、最期まで家族が協力し合って、その人らしい生き方ができるような世の中になっていく事を願っている。なぜなら、父が身をもって、介護は辛いものではないと教えてくれたからだ。人と人とのつながりは、どんな大きな試練にも立ち向かえる力を持っている。

最高の薬

大西 賢

ホームヘルパーの資格を取ったばかりの新米介護職員である私が、初めて派遣されたのが藤田さんの家だった。藤田さんは八十歳で、老朽アパートに一人で暮らしていた。最近、足腰がめつきり弱り、買い物などに行けなくなってきたので、そんな身の回りのお世話をするために、私が派遣されたのだった。

長年、大工さんをやってきた人だと聞いていたので、私は最初、おっかなびっくりだった。大工さんという響きが、なんだか豪傑で勇ましい気がして、やや怯えたのだ。正直、根性論を振りかざす肉体派のような気がして、警戒心もあった。

ところが、いざ藤田さんと会ってみると、拍子抜けしてしまった。豪傑な肉体派どころか、デパート店員のような優しい物腰の人だったのだ。私は誤った先入観を持っていたた

めに、怯える必要のないことに怯えていたのだった。

藤田さんの身の回りの世話は、案外楽だった。買い物と洗濯、余った時間に台所を掃除するだけだった。新米ヘルパーだから、簡単なところを斡旋してもらえたのだと思う。

（これは楽ちんだなあ）

そんなふうにいるながら、私は藤田さんのお世話を毎週するようになった。

ところが、藤田さんのお世話は、実はそんなに楽ではなかったのだった。

藤田さんは、今の生活をとっても寂しく思っていた。それはそうだろう。一日中、部屋に籠もりっぱなしなのだ。朝起きてから夜寝るまで、誰とも会わないし、誰とも喋らない。歩けるうちはまだ良かったのだが、歩けなくなつてから、周囲との接触は極端に減った。藤田さんの部屋はアパートの二階であり、階段を自力で降りられない藤田さんは、どこへも行くことができないのだ。藤田さんは、「自分は一人ぼっちである、自分は孤独である」という強い気持ちを抱えながら暮らしていた。

かといって、外出を勧めても、藤田さんは部屋から出ようとはしなかった。藤田さんの身体機能はかなり衰えており、尿失禁をすることもたびたびだった。そして、藤田さんは、

そんな衰えをととても恥じていたのだった。

「髪が伸びてきたから、一緒に車椅子で床屋さんに行きましようよ」

と誘っても、絶対に「うん」とは言ってくれなかった。

「ここまで弱った姿を誰にも見せたくないんだ……」

そんなことを小さな声で呟く藤田さんに、新米ヘルパーの私はかける言葉がなかった。

かといって、老人ホームに入る意思もなく、三十年以上暮らしたこの老朽アパートで生きていきたいというのが、藤田さんの思いだった。

一回か二回、藤田さんの部屋を訪れて、私はすぐに藤田さんの優しさが分かった。驚くほど、周囲に気を遣う人だったのだ。普通、ヘルパーが来ても、高齢者はお茶やお菓子などは出さない。ヘルパーは仕事で来ている訳であり、金品の授受はもちろん、お茶やお菓子すらも受け取れないことを、あらかじめ高齢者に言っているのだ。だが、藤田さんは、そんな決まりを守ろうとしなかった。どんなに「いりません、受け取れません」と言っても、必ずお礼の品物を渡そうとした。ある時は「ご苦労だったね」と言いながらサイダーを渡そうとし、ある時は「面倒かけてごめんね」と言いながらカニの缶詰を渡そうとした。

どんなに断つても、必ずお礼の品物をくれるのだ。そのような心優しい人だったからこそ、「自分の弱った姿」を見られることに、強い抵抗があったのかもしれない。

そのうち、藤田さんは私に思い出話をしきりに語るようになった。戦争中の苦しかった話や、故郷の青森の話などを、一生懸命話した。

「もう、いつ死んでもいい」

そんな言葉を、藤田さんはだんだん数多く口にするようになった。

私は、どんな姿でもいいから、藤田さんに生きていて欲しいと思った。車椅子でもいいから、失禁してもいいから、生きていて欲しかった。「自分の生きた証」を語り出す藤田さんを見て、心からそう思った。

(お願いだから、長生きして下さい)

藤田さんの部屋を訪れるのが楽しみになっていた私は、何度もそう思った。そして「俺は一人ぼっちだ」と思い込んでいる藤田さんに対して、「そうではないよ、みんながついてるよ」と言いたくてたまらなかった。

そんなある日、藤田さんは救急車で病院に運ばれた。体調が急激に悪化したのだった。

入院した藤田さんを、大勢の人が見舞った。こんなにこの人は愛されていたのかと驚くほど大勢の人が、病室にきた。そう、「俺は一人ぼっちだ」と思い込んでいたその考えは間違いであって、藤田さんは、大勢の人に支えられていたのだ。

「孤独」は自分がつくった幻想であることが多い。自分は「孤独だ」と思っているとしても、実は多くの人から支えられていたということは、よくあることだ。世の中には「絆に鈍感な人」というのがいて（私もそうだ）、周囲からの支えに気付かない人がいる。藤田さんは救急車で運ばれたが、それだって、「最近見ないから心配になった」という近所の人から来て気付いたのだった。案外、「自分は孤独だ」と思い込んでいる人ほど、多くの人から支えられているのかもしれない。

藤田さんは、身の回りの世話をする私に感謝しているようで、それはすごく嬉しいのだが、私は「感謝」自体は、あまり欲していない。正直、感謝されなくてもいいとすら思っている。藤田さんが「自分は一人ではない」と思って前向きに生きてくれること、それだけを望んでいる。たぶん、日本中のヘルパーが、高齢者にそれだけを望んで仕事に励んでいるのではないか。

入院は確かに藤田さんにとって、不幸な事態であった。長く一人暮らしを続けてきた藤田さんにとって、ややストレスの溜まる生活のようである。だが、

「病院は就寝時間が早くて困るねえ」

などと言って笑う藤田さんの顔は、以前と比べてとても明るくなった。大勢の人がお見舞いに来てくれたことによって、「自分は一人ではない」と気付いてくれたようだった。そして、健康状態も、驚くほど良くなってきている。

「絆」を確認することは、時として人間の健康状態を劇的に改善する。「自分は一人ではない」という安心感と心強さは、弱った身体を元気づけてくれる。

「絆」は人間にとって、最高の薬だと信じている。

わたしと「絆」

横溝 典子

命を授かり誕生する、これが私たち人間の始まりです。どんな人にも、そこには人との関わりがあり、つながりや愛があると信じています。

人が成長する過程で、一人で生きていける人は誰もいません。乳幼児であれば母乳やミルクが必要であり、その月齢に合わせて必要な食事や環境を誰かが与えてあげなければ、育つことのできないのが人間です。

それが母であるか、他者であるかは関係なく、生きていくために必要であるから求めるのではないのでしょうか。「必要だから求める存在」それは大人になっても老人になっても永遠に続いていくものだと思います。

幼少時の私は、祖父母と両親、姉と6人で生活していました。

両親は小学校教諭という仕事柄、母は私が生まれて3か月で仕事に復帰せざるを得ない状況でした。祖父母も健在でしたが、それぞれに体調が悪かったこともあり、私の育児に朝から夕方まで関わることは体力的に無理だったそうです。そんな中、祖母の近所の知り合いのご主人を亡くしたばかりOさんから、「私に預からせてもらえないでしょうか」と申し出があったそうです。

Oさんには、大学生の息子と娘、身寄りのなかった中学生の子を女手一つで育てていく中で、私の面倒も見てくれるとのことでした。経済的な問題も確かにあったと思いますが、母にとっても、近所で祖母の知り合いであり、育児のベテランであればとても安心だったと話していました。

毎朝母が8時前には私を預けて、夕方17時過ぎに迎えに行くという生活が始まりました。時間ごとのミルクから始まり、離乳食が始まる時期には、「のんちゃんは今日ギョーザを食べたのよ!」と満面の笑みで教えてくれて、実際母はびっくりしたけれど、預けている身だから仕方ないと腹をくくったと言っていました。

気づくと、Oさんのことを「ママ」と呼ぶようになっていました。幼稚園に通う頃になると、自分でできることはしなければならぬようになり、ボタンが留められないくらいですぐに泣く子でした。甘えん坊だったわけです。その時には「なんでそんなことで泣いているの！一人でできない時は呼びなさい！」とよく怒られたものです。一家を支えてきた母のOさんですし、はつきりと物を伝えるOさんです。そんな声は昔の家ですから、隣近所に筒抜けでした。

その頃母は、近所の方に、「のんちゃん可哀そうよ。いつも怒られていて泣いてばかりよ。他の方に預けたほうがいいんじゃない？」と言われることがしょっちゅうあったそうです。しかし母は、一度覚悟を決めていたので、「大丈夫よ」と言い返したと言っています。自分の大切な小さな子供を預けているわけですから、内心は不安も抱えていたそうです。

幼稚園の年中さんにもなれば、私も友達との関わりができはじめ、自分の気持ちも確立していったからでしょうか、帰りに友達と2人で幼稚園から抜け出して、しばらく遊んで帰ったことがありました。その頃に、大変な事態になっていることも知らずに、鼻歌を歌

いながら呑気に近所の川を一人で戻っている時でした。血相を変えてOさんが走って飛んできました。「のんちゃん！のんちゃん！良かった、良かった。心配したんだよ。」と泣きながら私を抱きしめたのを鮮明に覚えています。ぎゅーっと抱きしめられたその感覚、とつても暖かかったです。きつと、Oさんは泣きながら走って探し回っていたのでしよう。

育児をお願いしていた契約期間は、実は小学校に入った時点で切れていたそうです。それなのに私は何も知らずに、帰る家はOさんの家でした。夕方になると祖母が迎えにくるまで、ずっといつもの場所に座ってテレビを見たり、猫と遊んだりしていました。その頃の私は、Oさんの家は私の家だと勘違いしていたのかもしれない。自分の帰る家が2つあることを不思議にも感じませんでした。そんな生活が、実は中学校卒業まで続いていたことを、実の母は知らないかもしれません。

中学、高校、大学、社会人と私が階段を昇って行くその過程すべてに、Oさんがお祝いをしてくれました。年頃になり、Oさんの家に通うこともなくなりましたが、近所で会うと、いつも嬉しそうに私を抱きしめてくれるOさん。

ある日Oさんに偶然会い、これから久しぶりに遊びに行つていいですかと尋ねると、「う

んうん、おいで。何か店屋物を取って食べよう」と快諾してくれました。久しぶりにテーブルを囲み話していると、実は若いころから糖尿病を患っていて、食事制限をしていると教えてくれました。その日は中華料理屋で出前をとってくれて、本当は食べてはいけなと言われている塩分たっぷりのこつてりとした中華料理に付き合ってくれていたのです。「そんなしょっぱいものを食べない方がいいんじゃないの？大丈夫なの？」と言うと、にっこり笑顔で「たまにはいいのよ、のんちゃんが久しぶりに家に来てくれたんだから、私だって食べたくなくなっちゃうのよ。」と言ってくれたのです。

更に、もう一つ宝物が出てきました。「いつか見せようと思っていたのだけど、実はのんちゃんの赤ちゃんの時の写真がいっぱいあるのよ。見ていく？」と古いアルバムを開いてくれました。そこには、まだ生まれて間もない私の写真や、初めて歩いた時の写真、初めて離乳食を食べた写真、幼稚園の制服で気取っている写真の数々が貼られていました。「私ね、全部覚えてるんだよ。本当に可愛かったんだよ。」と話してくれたその顔は、まさに母の顔でした。そんなアルバムがあることすら知らなかった私は、胸が込み上げるような、なんとも言えない嬉しさを感じたのです。

私には母が2人もいる！と実感せずにいられてませんでした。幼少の頃に怒られたのは、私がOさんの家族の一員だったからです。血のつながりはないかもしれないけれど、OさんはOさんの家族と同じように私を育ててくれて、愛情を注いでくれていたことがはつきりとわかりました。私は幼少の頃から、こんなつながりを持てたことを心から感謝してやみません。

Oさんの家には、私の祖母を含め、近所のお年寄りみんながよく集まる場所でした。その中にいつもいたからでしょうか、お年寄りと接することが楽しく感じていましたし、きっと今私がこの仕事を選んだ原点になっていると思います。

現在私は生まれ育ったこの地にある介護保険制度で在宅サービスを提供する事業所に身を置き、ケアマネージャーとして地域のお年寄りや障害者のケアプランを作成しています。私を育ててくれたOさんも、85歳になりました。Oさんに恩返しをするつもりで、関わる利用者さん全てに対してその気持ちをずっと忘れずに、私はこれからもできることを精一杯取り組んでいきたいと思えます。

Oさんにとって「必要だから求める存在」の一人になれますように。Oさんのつないで

くれた「絆」を、もつともつと広げられますように。

きずなく天国のお父さんからの贈り物

伊藤 里枝子

「マサヤには何も罪はないけれど、私はマサヤのためにもう何もしてあげられない。離れて生活することなど私にはとうてい我慢できず、私にはマサヤを忘れてしまうことしか私自身を保つ方法が見つからない。これから先、どんな生活をし、どんな人生を送るのか。私には想像もつかないが、努力を惜しまず、自分の人生を切り開いていってほしいと願う。きつとこの先、マサヤの母は苦勞して君を育てることになるだろう。マサヤが大きくなったとき、母を助けて幸せにしてやって欲しい。マサヤの健やかな成長と幸福を心より祈る。」

マサヤ君が1歳6か月の時、突如として訪れたお父さんとの別れ。この手紙を書いた時、お父さんはきつと息子には一生会えることはないだろうと予期したのかもしれない。

1995年2月19日、マサヤ君が誕生した。お父さんは出産に立ち会い、息子が生まれ

る瞬間、我が子の誕生に目を潤ませた。出産後、お父さんは料理、洗濯、掃除などの家事に積極的にいかかり、マサヤ君のおむつも替え、ミルクもあげ、息子を心から愛した。

マサヤ君が1歳6か月になった頃、お父さんは仕事に事故に遭い右足親指を骨折し仕事を失った。会社の寮からも退去を命じられたが、親子3人には行き先がなかった。お父さんは母子の元を去った。マサヤ君はお母さんに連れられて友人宅を転々としたが、オーバーステイとなっていたマサヤ君の母はその後、入国管理局に捕まりフィリピンに強制送還となった。

成長するにつれて「お父さんに会いたい」という思いを募らせるマサヤ君。

そんなマサヤ君の夢を叶えてあげたいという思いからマサヤ君とお母さんは私たちの事務所に相談にやってきた。お二人のお手紙を預かった。マサヤ君は小学校6年生になっていた。預かった手紙をお父さんに送った。お父さんの住所地はホームレスの人たちが利用する簡易宿泊所と呼ばれる場所だった。母子と別れた後のお父さんの苦労が伺われた。

「お父さん、元気ですか？ お父さん、僕は寂しい時にはいつも二人で写っている写真を見えています。お父さんの写真を下さい。友達に見せてあげるんです。いつもみんなから「マ

サヤはうそつき、パパの昔の写真しかない」って言われます。みんなお父さんの写真をたくさん持っています。大きくなったらお医者さんになってお母さんの病気を治したい。お母さんは糖尿病と高血圧で8つも薬を飲んでいきます。お母さんはもしお母さんに何かがあったらお父さんの所に行きなさい、って言います。お父さんは僕を大切にしてくれるって。会いたいよ。お父さん。僕が大学を卒業したら、日本に行きたい。お父さん、もし、新しい家族ができたとしても、息子の僕のことを忘れないで下さい。小さい時から僕はいつも神様にお祈りしていました。「お父さんと会って話ができますように」。マサヤより。」

「お元気ですか？ マサヤが先日こんな歌を歌っていじめられていたのです。」

僕はフィリピン人マサヤです。フィリピン人でもなく日本人でもない

じゃあなにさ、父親がいない異国人（エイリアン）

マサヤの顔は怒っているようでしたが友達を殴りませんでした。友達のもとを離れ壁を蹴って泣き崩れていました。私はマサヤが泣き止むまで待っていました。マサヤが落ち着いた頃、私はマサヤと一緒に家に帰りました。私はマサヤの首に腕をまわし、キスをし、愛しているよ、と伝えました。その日の夕食にはマサヤの好きなラーメンを作りました。

寝る前にはたくさんのお話をしました。あなたと一緒に動物園に行った時のこと。アルバムを見せて、あなたと一緒に誕生日のお祝いをしたときのこと。マサヤは私のおなかの中にいたときによく動いていたこと。あなたと一緒にお鍋やすき焼きを食べたこと。私はマサヤに伝えました。ママの人生の中で一番素晴らしい出来事は、パパと出会ってあなたが生まれたことよ、と。ママの人生の中で心の底から愛した男性は2人だけ。それは、あなたのパパとマサヤよ、と。どんな親でも我が子が傷つけられたり、つらい思いをするのを見るのは嫌です。病気になれば涙を流すし、どんな困難にも耐え、できることならば、子どもに降りかかるすべての災難を自分が代わりに受けたいと思うでしょう。

もし、私があなたに悪いことをしたらごめんなさい。私もあなたの妻として弱いところ、至らなかつたことがあつたと思います。一人で母親と父親の役目を負うのは本当に大変だと気づきました。大変ですが幸せです。

今、私の母がどのようにして私を育てたのか、ようやく理解できました。マサヤはあなたのことを本当に愛しています。あなたの写真をお財布に入れて持ち歩いています。あなだが買ってくれたおもちゃを大切にしまっています。トーマスの機関車もまだあります。

あなたが作ってくれた白い猫。マサヤはずっとそれを大事にとっていてキスしたり抱きしめたりしていて、私が洗濯すると怒るので、今では真つ黒な猫になってしまいました。あなたが編んだセーターもマサヤは枕の中に入れて毎日寝ています。マサヤの宝物はすべてあなたのものです。

あなたの居場所が分かった、と連絡があったとき、マサヤは本当にうれしがって、『やった！やった！神様、ありがとうございます！』と叫びました。

しばらくするとマサヤは嬉しさのあまり泣き出してしまいました。私も思わずもらい泣きました。マサヤはあなたに会えることを、ずっと神様をお願いしていたのです。どうか、お願いします。もし、マサヤがここであなたに拒否されたら、マサヤの心は踏みにじられ、つぶされてしまうでしょう。あなたが父としてマサヤのことを愛していると示してあげてください。この地上での私たちの人生なんて短いものです。なので、自分自身を大切に、また愛するものを大切にしましょう。あなたがマサヤを自分の子どもとして認めてくれることは、マサヤの人格形成のために大切なことです。自分に対する自信をつけることができます。劣等感を克服させてあげられるのです。一人の人間にとって、そのまま

受け入れられる、ということとは本当に重要なことです。マサヤの成長のために一緒に助け合いましょう。私たち二人があの子の親なんです。どうか、私とマサヤが今でもあなたのことを愛していると覚えていて下さい。」

お父さんからの返事はなかった。弁護士さんに依頼をして認知の調停を起こしてもらったこととなり、新しく住民票を取り寄せたところ、お父さんは2010年10月2日に亡くなっていたことが分かった。「お父さんに会うこと」。

マサヤ君の夢は叶わぬ夢となってしまった。第1回の期日には補助参加人としてマサヤ君のお父さんのご両親が出席し、DNA鑑定を求められたので鑑定を実施した。鑑定の結果は陽性でマサヤ君とお父さんの親子関係は証明されたため認知を認める判決が出た。弁護士さんが聞いた話ではお父さんは事故で亡くなつたらしい。マサヤ君はその後、日本人のお父さんの子として日本国籍を取得し、お父さんがくれた日本名「真也」という名前を選んだ。お父さんから愛されていたという思いを心の糧に「自分の人生を切り開いてほしい」と心から願う。

下町の路地裏で…

佐々木 直子

すっきりと晴れた秋の空に、今日も東京スカイツリーが良く見えています。少しずつ高くなつていく姿を見守りながら、毎日山のような洗濯物を自転車に積んで、路地裏にある小さな店へと急ぐ私。この町で手作りのお弁当屋を主人と二人で始めてから、早いもので17年が経ちました。その間に授かった子どもは7人、一男六女の大家族です。

「いつか自分の店を持ちたい。」そんな主人の夢を下町のこの場所で叶えた頃は、まだ長男が3歳になるちよつと前、長女は1歳半でした。知り合いもなく、右も左も分からない土地での生活は、とにかく不安ばかり。路地裏での商売はなかなか軌道に乗らず、そこそそ生きていくのに必死でした。

早く馴染もうと思っても、昔からずっと住んでいる人が多いこの町は、近所のつながり

が強く、それがかえってよそから来たものには、なかなか入りにくい雰囲気を感じさせていました。孤独感に押しつぶされそうになっていたあの頃、店のお隣のおばあちゃんはいつも優しく声をかけてくれました。ご主人と息子さんと3人で、家で靴を作る仕事をしていました。

毎朝ご自分の家の周りを掃き掃除していると、うちの店の前まで丁寧に掃いてくれました。お礼を言ったのがきつかけで少しずつ話すようになり、老人会でもらったお菓子などをとっておいては、子供たちにもくれていました。

兄妹げんかで兄が泣いている声を聞いては、「あの子は優しい子だから、妹に言い返せないんだね」と気にかけてくれました。赤ん坊をおぶいながら、大きなお腹で洗濯物を干す私を不憫に思ったのか、「私をもつと若かったら、洗濯ぐらいいつでもしてやったのね。」といつも言ってくれていました。

おばあちゃんに挨拶をする事から始まったご近所づきあいは、子どもたちをきっかけにして少しずつ広がっていきました。この路地に子どもの声が聞こえるのは本当に嬉しい、元気がもらえるといつも言ってくれました。にぎやかすぎて申し訳なく思ってい

る私には、その言葉はずいぶん救いになっていました。

そんなおばあちゃんの言動が少しずつおかしくなっていたのは、ようやく店が地元のお客様に受け入れていただき、生活のめどが立ち始めた頃の事でした。

おじいちゃんが亡くなつてからほんやりしていることが多くなり、恒例の朝の掃き掃除も見かけない日が続くようになりました。

ある日、台所の小窓から突然「誰か助けて〜出してくれよ〜」と叫ぶ声が聞こえて、慌てて飛んでいくとおばあちゃんが大声を上げてこちらを呼んでいました。家に入ろうとすると外からつかえ棒がしてあり、外に出られないようになっていました。不思議に思い、その頃外に働きに行っていた息子さんに尋ねると、認知症の症状が出ているとの事。一人で出て行ってしまうので、仕方なくそうしているとの事でした。

そこで、ご自身もお母さんの介護の経験を持つ向かいに住むおばさんと、路地の入り口にある焼き鳥屋のおばさんとで相談をして、おばあちゃんが外へ出ていなくなってしまうないように皆で見守ることにしました。それぞれに昼間は仕事をしていますので、とにかく気がついた人がおばあちゃんに声をかけて、何とかなだめて家につれて帰ることにし、

大きな道路へ出てしまわないように気をつけていました。

お客様を相手にしながらの見守りはなかなかタイミング良くとはいかず、気がつくとき小さな手提げ一つ持って、フラフラと歩いている姿を追いかけることもしばしばでした。向かいのおばさんとはときどきおばあちゃんのおむつを換えにいました。「ここに来た時からの長い付き合いだからね。ほっとくわけにもいかないだろ。」さばさばした笑顔で言っていました。息子さんは「いつも申し訳ない。世話になつて。」と言いながら、夜中に騒ぎ眠れないこと、辛くていっそ死んでしまおうかと思ったりもする事を打ち明けてくれました。私にはただ聞いてあげることしか出来ませんでした。

ある日、だいぶ遠くまで歩いたものの、疲れて座り込んでいたおばあちゃんを見つけて、「さあ帰ろう」と声をかけたとき、おばあちゃんが私に言いました。「おうちに帰りたいんだよ。」住んでいる家を出て、家に帰りたいとはおかしなことを言うなあと思っていました。息子さんに尋ねると、昔自分が小さかった頃家族で住んでいた団地があつて、おそらくそこへ帰りがついているのだらうとの事でした。今は分からなくなつてしまつたのに、昔の思い出ははっきりとおばあちゃんの心の中に残っている。

そう思った時から私は、頼まれた夕食のお弁当を届けるついでに少しでも時間がある時は、おばあちゃんの話に付き合うことにしました。子どもの頃から両親から離れて奉公に出て、苦勞の連続だったこと。戦後の大変な時期を2人の子どもを抱えて必死になって生きてきたこと。そっと手を握りながらおばあちゃんの話をしている時、亡くなった自分のおばあちゃんに何もしてあげられなかったことを深く後悔しました。せめて今ちゃんと話を聴いてあげたい。

そう思っていたのに、おばあちゃんはだんだん弱っていき、私が届けるお弁当も飲み込めなくなつたと言う事で、介護の方が入るようになり、次第に顔を見る機会もなくなつてしまいました。

それからしばらくして、おばあちゃんが施設に入ったことを知りました。何年もおばあちゃんのお世話をしていた息子さんの苦勞を思うと、寂しいとは言えませんでした。

そして今年6月、大好きだった白鬚神社のお祭りを待たずにおばあちゃんは旅立っていききました。自宅にご遺体が帰ってきた時、おばあちゃんに会いに子供たちを連れて行きました。

私は人の死をなるべく子どもたちには立ち会わせたいと思っていました。小さい頃お世話になったこと、ご近所として優しく接してくれたことに感謝してほしいと思ったからです。子供たちはちゃんと手を合わせておばあちゃんにさよならを言っていました。

新盆が過ぎた頃、息子さんがお仏前に供えてあった果物やお菓子を、子供たちにと持ってきてくれました。お仏壇のお下がりを頂くと、何だかまたおばあちゃんにご馳走になったような気持ちになりました。狭い路地では今日も子どもたちの声がにぎやかに聞こえています。優しい風がすつと通ると、そこにほうきを持って穏やかな笑顔で見守ってくれているおばあちゃんがいるような気がしてなりません。

育児を通じた親の成長と育児休職という決断を通して

福井 聡

専業主婦だった妻が妊娠・出産という10か月にわたる大仕事をこなした後、出産の3か月後に就職することとなりました。結婚前は、子育てなんて楽しくないに決まっているし、女性がするものと決め込んでいた私。いったい誰が育てるのだ???就職直後の妻は育児休職できないため、答えは「私」しかありませんでした。

そんな経緯で取得することとなった9か月間の育児休職。男性としては会社でも前例が無く、また家事の経験も乏しい私は戸惑いました。高校では家庭科の授業も受けた覚えがないほどの状態。料理なんて全くできないし、おむつはどうやって替えるの?という状態。この日から家事育児の猛勉強が始まりました。

一方、育児『休職』というぐらいなので、子育て・家事の合間に読書でもして時間をつ

ぶそうかなと軽く考えていた私。でも実態は甘いものではありません。育児・家事をするだけで一日があつという間に過ぎてしまい、休職当初は曜日感覚すらよくわからない日々が続きました。

しかし、そんな中で私を支えてくれたが社会の温かさ。娘と二人でバスや電車に乗れば、若い人だけでなくご年配の方まで席を譲ってくれようと声掛けしてくれます（恐縮してお断りしていますが）。また、ベビーカーを押して階段の前でうろろろしている私を見て、周りの方が「一緒に運びましょうか？」と声をかけてくれます。

これまで殺伐とした通勤ラッシュ時しか電車やバスに乗る機会がなかった私、娘のおかげで社会ってこんなに温かいのだ、まだまだ日本も捨てたものじゃないと実感しました。それと同時に、これまで私自身も社会に冷たく接してはいなかったかと反省するに至りました。温かい社会の一員になりたいと真摯に思いました。

子育ては、ミルクやおむつ替えから始まり、お風呂入れや寝かしつけに至るまで、始めは「作業」として捉えていたので全然楽しくありませんでした。しかしある時から考え方を換え、この一つ一つの「作業」は、実は娘とのコミュニケーションであり、娘の成長を

支える一過程であると捉えるようになってから俄然楽しくなってきました。考え方によっては、育児のイライラは楽しみに変わっていくものなんだな、と思うようになりました。

それとともに、妻との関係も一変しました。育児休職をとる前は、家に一緒にいても事務的な会話しかしませんでした。妻も、専業主婦で家にいることが多かったため、なかなか話す話題もなかったようです。それが、妻が働きたことによつて、家庭内では妻の仕事の話、子育ての話に花が咲くようになり、将来どんな家庭を築いていきたいかということまで真剣に話すようになりました。ある意味、妻も私も働くことで、夫婦関係が対等になり、二人で稼いでこの家庭も守っていくのだという強い絆が生まれました。以前はあまりなかった家庭内の笑顔も、本当にたくさん見られるようになったと実感しています。私も、一人で家庭を支えていかなければならないというプレッシャーから解放されて、夫婦チームで頑張っていくという意欲が湧いてきました。

育児の楽しみの一つとして、離乳食があります。毎日、初めての食材に接する娘がどのような反応をするかを想像しながら、離乳食を作っています。私の好き・嫌いと同じ反応を示すと、なんだか嬉しくなりますし、私が大好きな食べ物は、娘にも好きになってもら

おうと調理に気合が入ります。育児で食事を与える瞬間が、一番娘との絆が深まる瞬間。妻はおっぱいをあげることで、娘との絆を強くしていて大変うらやましい限りではあるものの、男性だって絆を深めることができるのだ！と自負しています。初めての寝返り、はいはい、つかまり立ちの瞬間に立ち会うことで、娘への愛情も日増しに強まっています。

育児休職に入ってから6か月が経過し、残りも少なくなってきました。最近では育児休職の体験談を講演する機会を持つたり、ワークライフバランスを研究する学生にアドバイスしたり、育児の楽しさ・面白さを情報発信するまでになりました。子育て支援施設にも積極的に顔を出し、これまであまり接してこなかった地域との接点も増えました。まさに子供のおかげで、地域社会にも溶け込んでいくことができました。

育児に深くかわかることで、娘との絆は大きく深まりました。それとともに、妻との関係は大きく改善し、本当に家庭が居心地良い場所となっています。それだけでなく、これまで全く接点のなかった地域社会に溶け込むことができ、近くのスーパーで知り合いに会うことも増え、なんだか地域に出るのが楽しくなりました。このように、私の生活を良い意味で大きく変えてくれたのは娘の誕生であります。「子はかすがい」と言いますが、わ

が娘の誕生はかすがいどころではなく、宝くじにでもあたったかのような劇的な生活の変化を私にもたらしめました。また、娘が成長したら、小さいころの娘の話を聞かせてあげて、一緒に笑いあいたいと思います。

家族力大賞11 ～家族や地域の「きずな」を強めよう～ 事業概要

3・11 東日本大震災 私たちは、かつてないほどの大災害を体験しました。東京でも震度5強に見舞われ、街には帰宅困難者があふれました。多くの人たちが自分が今できることを考え、支援の輪が広がっています。今ほど、家族や地域のきずなの大切さを痛感することはありません。あなたのまわりでかけがえのない家族のきずなや、家族のような地域のつながりを実感したり、新しいきずなが築かれた話を聞いたことはありませんか。家族力大賞事務局では、家族や地域の「きずな」や「つながり」を感じた体験談を募集しています。

主 催 社会福祉法人東京都社会福祉協議会

後 援 東京都
社会福祉法人東京都共同募金会

応募資格

- (1) 都内在住、在勤又は在学の方
- (2) 東京都で認証を受け活動するNPO法人等

選考方法 運営委員会にて本審査を実施

選考基準

- ① 作文については、人から聞いたたり、どこかで読んだものではなく、ご自分で体験されたものであるか（ただし、親子、祖父母と孫による聞き書き、福祉施設職員による利用者からの聞き書きは可とする）。写真・イラストについては、未発表で、家族のきずなや地域のつながりが感じられる作品になっているか。
- ② 実践や体験にもとづき具体的に表現されているか
- ③ 地域や社会との関わりやつながりがテーマになっているか
- ④ 家族や地域などとの新しい関係を提案しているか
- ⑤ 個人の体験を超えて、他の人や社会へのメッセージになっているか

受付期間

平成23年7月1日～平成23年10月15日

家族力大賞運営委員会

委員長

袖井 孝子（お茶の水女子大学名誉教授）

委員

井之上 喬（株式会社日本パブリックリレーション研究所 代表取締役社長）

西崎 哲郎（KFi株式会社 会長）

澤田 敬介（東京新聞編集局生活部 部長）

高橋 陽子（日本フィランソロピー協会 理事長）

山崎 敏子（特定非営利活動法人コンピュータエンターテインメントレーティング機構）

杉村 栄一（東京都福祉保健局長）

（敬称略）

ご協力いただいた企業の皆様

協賛

東京新聞

協力企業

特定非営利活動法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

足立成和信用金庫

七島信用組合

株式会社ユタカ

発行日 平成24年3月21日
発行 社会福祉法人 東京都社会福祉協議会
東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
TEL:03-3235-1171
印刷 共立速記印刷株式会社

この冊子は東京都共同募金の助成金で作成しました。